

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380876

研究課題名(和文) 中学校のスポーツ指導に関する文化心理学的アプローチ

研究課題名(英文) A cultural psychological approach to sports coaching in junior high schools in Japan

研究代表者

尾見 康博(Omi, Yasuhiro)

山梨大学・総合研究部・教授

研究者番号：20264575

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：教師がボランティアで、時に自身が未経験の競技のコーチとなったり、生徒は入部が義務づけられたり、一度入部したらやめづらかったり、教師、生徒双方とも一年通して休みがあまりない場合も少なくない部活動、とりわけ運動部の制度や慣習は欧米だけでなく、東アジアでも見られない日本独自の仕組みであった。指導の仕方も、日本では怒号や罵声によることも珍しくないが、欧米諸国では強豪チームですら、そのようなコーチングはほとんど見られず、チームの目標も楽しむことを第一の目的としていた。部活動が日本独自のスポーツ文化の基盤として機能していて、その負の側面に目を向ける必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：It was demonstrated by an ethnographic study in some foreign countries that the system of Japan's extracurricular sport activities for junior and senior high school students were so unique in comparison with foreign countries' activities. The author had some interviews to parents and coaches and observations of practices and games for youth sports in the USA, France, Germany, Denmark and China. Coaches in the countries were experienced and/or trained and, of course, they were willing to take on the role of coach. Also many coaches, even in the very competitive clubs, said that fun was the first goal for their teams. The unique system of the activities in Japan seemed to underlie the sport culture in Japan.

研究分野：教育心理学

キーワード：部活動 文化 規範 課外活動 スポーツ指導

### 1. 研究開始当初の背景

教育のグローバル化を考える上で、外国語教育だけでなくそれ以外の教科の教育、とりわけ、グローバル化と本来相性がよいであろう、スポーツ(体育)教育を検討することには大きな意義があるだろう。

そしてその際、日本の中学校を比較文化的観点から丁寧に調査することが必須と考えられる。なぜなら、日本の中学校は、先輩後輩の序列化を始め、我が国独自の慣習や制度が根強く残っており、グローバル化になじみにくいように思われるからである。

そもそも、小学校や中学校、高校への入学といった経験は、子どもたちにとってかなりの緊張を伴う大きな出来事である。思春期を迎えるというデリケートな時期に通学する学校が変わるだけでなく、制服の着用が一般的になったり、校則が厳しくなったり、先輩後輩関係が成立したりすることは、子どもたちにどのような影響をもたらすのであろうか。

また、日本独自の制度と言われる部活動、とりわけ運動部のしきたりは日本国内でもいい意味でも悪い意味でも独特のものとして語られることが多い(中澤, 2014 ほか)。しかしながら、体育の指導と運動部の指導の差異について、あるいは、海外の課外活動との差異について、これまであまり問い直されることはなかった。そこで、課外活動である部活動の教育、指導にどのような特徴があるのかについて、正課の活動、及び海外の実態を比較対象としながら検討することには大きな意味があるように思われる。

### 2. 研究の目的

日本の中学校の教育実践、特にスポーツ指導に焦点を当て、諸外国のスポーツ指導の実態を丹念に調べることにより、日本独自の慣習や制度を浮かび上げさせ、そのことが具体的な教育実践や指導法、あるいは生徒たちの生活や態度にどのように結びついているかを明らかにする。

そして、そのことによって、日本のスポーツ指導のあり方を文化心理学的に考察し、教育のグローバル化を進める上での理論的・実践的示唆を得ることを目的とする。

### 3. 研究の方法

(1) アメリカのボストン郊外で中学生女子バスケットボールクラブのコーチをしている男性と日本の元世界陸上選手権メダリストである為末大氏を交えたシンポジウムを企画し、日本の中学生のスポーツ指導の問題点を多様な視点から議論し、中学生のスポーツ指導に関する論点を整理した。

(2) フランスのパリ及びトゥールーズにおいて、サッカー、体操、マウンテンバイクなどの放課後スポーツに参加している中学生とその保護者にインタビューを実施した。サッ

カーについては、練習の観察およびコーチへのインタビューを実施し、体操については、公式試合を観察した。その他、フランス柔道連盟の理事を対象にインタビューを実施した。

(3) ドイツのベルリンにおいて、サッカーの練習及び試合とグラウンドホッケーの練習を観察し、いずれもコーチを対象にインタビューを実施した。

(4) アメリカのシアトル郊外において、サッカーの練習および試合を観察し、学校のアスレチックディレクター及びサッカーチームのコーチにインタビューを実施した。

(5) 中国の北京において、中高生のサッカー、陸上、武術、バスケットボールの練習風景を観察し、コーチへのインタビューを実施した。インタビューは北京師範大で博士号を取得した日本人通訳を介してなされた。

(6) デンマークのオールボーにおいて、アイスホッケーとバスケットボールの練習を観察し、サッカーとバスケットボールのコーチにインタビューを実施した。

コーチや保護者に対するインタビューにおいては、練習や試合のスケジュールや時間、子どもたちは複数のスポーツを掛け持ちすることが可能か、コーチングの際に気をつけていること、チームの目標などを尋ねた。アスレチックディレクターに対しては、学校の教師がコーチをすることの意味や、手当などについて尋ねた。

### 4. 研究成果

(1) アメリカの放課後スポーツは地域クラブが盛んであるが、学校でも季節毎にさまざまな放課後スポーツが展開されていた。また、同一生徒が地域クラブと学校チームの掛け持ち、及び、複数のスポーツの掛け持ちも珍しくなかった。さらに学校でも地域クラブでもトライアウトによる選抜が行われることが多く、学校チームの場合には、希望が叶わない生徒も見られた。地域クラブチームではそれぞれのレベルにあわせたリーグが編成されているが、高校レベルになると初級者向けのリーグはほとんどなくなっていた。

(2) フランス、ドイツ、デンマークの欧州諸国では、放課後スポーツの主役は地域クラブであり、学校はほとんど関与していなかった。ただし、いずれの国でも、学校の課外活動として特定のスポーツを経験する時間を用意する試みが見られた。また、アメリカほどではないものの、中学生くらいまでの年齢では、一年で複数のスポーツを経験することは珍しくなかった。

(3) 欧米諸国では、スポーツは楽しむことを目的にしていることが一般的であり、それはたとえ全国レベルのチームであっても同様であった。また、練習は週に2-3回で、1回あたり1時間半から2時間程度、土日のいずれかに試合というのが一般的であり、夏休み等の長期休暇は基本的にオフで、家族で過ごす時間であった。

(4) アスレチックディレクターという役職が副校長待遇で用意されていることがあるアメリカは、学校スポーツもそれなりに盛んであり、欧州諸国とは異なっていた。教員がコーチをすることについても肯定的であり、外形的には日本との近似性も見られる。ただし、アメリカの学校スポーツのコーチは高額ではないものの有償であり、その額も実績が反映したりするので、日本の顧問制度とはまったく異なっていた。

(5) 中国のスポーツ教育（指導）は、学校教育との関連でさまざまな試みが始まっており、スポーツエリート育成かゼロかといったかつての状況から一変していた。エリート育成の中核であった体育学校のシェアは減少し、スポーツエリート育成とはいっても文武両道の全寮制の学校もあればプロチーム傘下のクラブから地域クラブまで多様な形態が現れ、都市部の子どもにとっては選択肢もそれなりにあるようであった。そして、学校にしてもクラブにしても、日本も含めた海外の先進的な取り組みを貪欲に取り入れようという姿勢も見られた。

(6) まとめ：外国人コーチのうち日本の部活動を知る人の言によれば、日本の部活動経験により、概してまじめだが、創造性に欠けるプレーヤーが育ってしまうと指摘された。また、コーチがプレッシャーをかけすぎているという指摘もなされた。そして、コーチや保護者の勝利へのこだわりも諸外国に比べると過大であった。また、トーナメントという用語は日本でいうところのリーグ戦も含まれているが、日本では一度負けるとその瞬間に大会が終わってしまうトーナメントに限定されていることが明らかになった。この日本型の「トーナメント」のこだわりが、負けてはいけないという思いにつながり、勝利至上主義につながっていることが示唆された。

日本の中高の運動部の根性主義や一途主義は国際的に見てきわめて独特であり、かつ、この慣習はスポーツを楽しむ対象にできない基盤づくりを提供しており、日本独自のスポーツ文化につながっていることが明らかになった。日本のスポーツ文化を相対化しより豊かなものにするために、部活動の負の側面に目を向ける必要性が示唆された。

<引用文献>

①中澤 篤史，運動部活動の戦後と現在：な

ぜスポーツは学校教育に結び付けられるのか，青弓社，2014

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

① 尾見 康博，アメリカからの帰国生とその家族が日本で困っていること，児童心理，査読無，994，2014，pp.119-125

〔学会発表〕(計10件)

① 尾見 康博，欧米のスポーツ環境から見た日本の部活動-bukatsu の文化心理学(2)-，日本社会心理学会第57回大会，2016，「関西学院大学（兵庫県・西宮市）」

② Valsiner, J., Marsico, G., Wagoner, B., Klempe, H., Omi, Y., et. al., Cultural psychology: A new science of the human nature, The 31st International Congress of Psychology, 2016, 「パシフィコ横浜（神奈川県・横浜市）」

③ 尾見 康博，サンプリングという誤謬-Not sampling but samplization-, 日本パーソナリティ心理学会第25回大会，2016，「関西大学（大阪府・吹田市）」

④ 尾見 康博，フランス中学生のスポーツ環境からみた日本の部活動：bukatsu の文化心理学(1)，日本心理学会第79回大会，2015，「名古屋国際会議場（愛知県・名古屋市）」

⑤ 東海林 麗香，尾見 康博，中澤 篤史，佐柳 信男，個性が育つ場を作る-学校教育，スポーツ指導の現場から-，日本発達心理学会関東地区シンポジウム，2015，「山梨大学（山梨県・甲府市）」

⑥ 尾見 康博，少人数教育は個性を活かせるか-小笠原村母島小中学校の事例から-，日本パーソナリティ心理学会第24回大会，2015，「北海道教育大学（北海道・札幌市）」

⑦ 尾見 康博，指導者からの体罰を肯定する若者たち-部活にとどまらない体罰の「効果」- 日本教育心理学会第56回総会，2014，「神戸国際会議場（兵庫県・神戸市）」

⑧ 東海林 麗香，尾見 康博，松嶋 秀明，杉山 ひとみ，西田 公昭，学校における文化研究の新たな可能性-学校行事と部活動に焦点化したフィールドワークから-，日本教育心理学会第56回総会，2014，「神戸国際会議場（兵庫県・神戸市）」

⑨ 佐柳 信男，為末 大，Duquette, K., 尾見 康博，Moreshead, C., 多様な個性を伸ばすスポーツ指導，日本パーソナリティ心理学会第23回大会，2014，「山梨大学（山梨県・甲府市）」

⑩ 家島 明彦, 池田 光穂, 齊藤 こずゑ, 安藤 泰至, 尾見 康博, 質的研究と倫理-対話と葛藤としての研究倫理-, 日本質的心理学会第 11 回大会, 2014, 「松山大学 (愛媛県・松山市)」

〔図書〕 (計 1 件)

① Marsico, G., Dazzani, V., Ristum, M., Bastos, A.C.S., Omi, Y., et al. Educational contexts and borders through a cultural lens: Looking outside, viewing outside, 2015, Springer, pp.255-266

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

尾見 康博 (OMI, Yasuhiro)  
山梨大学・大学院総合研究部・教授  
研究者番号：20264575

### (2) 研究協力者

渡辺 忠温 (WATANABE, Tadaharu)